

「ねえ、美容院いかない？ 美容院。 きれいなおネエさんがさあ、いっぱいいるところがあるの。 どーせヒマしてんだらう？ ねえ、いこ〜うよ。 いこっ。」

「えっ？」

□

電話の主は塚原さんだった。 塚原さんは日本の有名な精密機械メーカーの社員だ。今はパリの現地法人にいる。

知り合ったのは、その前の前の年TOURSの語学学校だった。
僕がこの学校に入ったときには、彼はすでにもう一年あまりもこの学校に通っていた。

新学期が始まってそう日もたたない頃、新しくやってきた日本人をみてやろうと、彼は校舎の前庭でうろうろしていた。

その時、ひとりの女の子に目をつけた。彼女は僕とはクラスは違うけれど、僕と同じ頃にフランスに来ていた。黒い髪は長く、切れ長の目と、ちょっと濃い目のメイクをほどこしたその容姿は確かに少し色っぽく、日本人の女の子の中では目立っていた。ショートカットが好きな僕のタイプではなかったけれど、気っ風のよい彼女の性格はいやみがなく、僕達は親しく話す友達になっていた。

その日も授業が終わり、僕は彼女を含め何人かの”新入生”と、冗談めいたことを言いながら立ち話をしていた。そんな時だった。

彼は狙いを定めた彼女に近づくため、僕たちのいる方にやってきた。

「こんにちわ〜。みんな、最近来たの？よかったらさあ、いろいろ教えといたほうがいいこともあったりするわけで、ねえ、どうかな、そこのカフェにでもみんなで行かない？どう？」と目は彼女に向けたまま、学校のすぐ横にある小さなカフェを指差した。

何人かは「ちょっと用があるんで。」とか言っとうまくその場からいなくなり、結局彼女と僕だけが残ってしまった。

小さなカフェのその小さなテラスに着くと、彼はしっかりと彼女の隣の席を確保し、その顔に笑みをうかべながら、そして相変わらずその目は彼女に向けたまま話し始めた。

「ぼくさあ、今一番上のクラスにいるんだけどね。でも先学期にはもうディプロムとっちゃって。だからしかたなく今のクラスにまたいるの。二度目なんだけど。しょうがないの。だってもっと上のクラスはないからね。ほかに行くクラスがないってわけ。まあそんなこ

んなで長くここにいるからさあ、いろいろこの学校のこととかー、町のこととかー、いろいろ知ってから。だから何かあったら言ってね。教えてあげるから。」

「.....」

「ところで何飲む？注文してあげるから。何にする？」

彼女はニヤッとすると、ちょっと色っぽい視線を遠くに向けて言った。

「じゃあ、何かジュース。のどかわいちゃって。冷たいもの飲みたいわ。」

「君は？」

「あ。じゃあ、僕は、コーヒー。コーヒーお願いします。」

「それでジュースは何がいいのかな？いろいろあるよフランスには。ねっ、どうする？」

「なんでもいいわ。おまかせします。」と彼女は遠くに目を向けたままちょっとそっけなく彼に言った。

「わかった。」と言って、彼はなじみのカフェのオヤジに手を上げると、注文をとりに来たそのオヤジに言った。

「ええと。彼女に搾ったオレンジジュース。氷もちゃんといれてね。あとコーヒー二つ。」

僕と彼女はその瞬間目と目が合った。確かに彼のそのフランス語は流暢ではあったけれど何か”変”だった。そう発音だった。僕と彼女は下を向いて少し笑いをこらえていた。

彼はそんなことには一向に気もつかず、ラッキーストライクに火をつけるとひとりで嬉しそうに足を組んで煙をはいていた。

「それできみたちはどこから来たの？東京？それとも.....」そこまで言いかけたとき、カフェのオヤジが「おまちどう。」と言って注文したものを持ってきてテーブルに置いた。

たしかにそこにはエスプレッソの小さなカップが二つはあった。しかしどうしたわけかそこにはジュースはなく、なぜか”ゆで卵”が三つ置かれていた。その”ゆで卵”達は丸いテーブルの真ん中で少しほこらしげに鎮座していた。

「えっ、なにこれ。」三人は一瞬ポカーンとしてしまった。

そしてすぐさまあわてた彼は、「あのオヤジ間違えやがって。」と言うと奥にいたオヤジを呼び、「これなに。違うじゃない。ジュースはどうしたのよ。ジュース！」

オヤジは「あっ、わかった。わかった。わるかった。」というジェスチャーをして、また奥に一度引っ込むとすぐもどってきた。そして一言「ほらこれっ。」と言うと塩の入ったピンをそのテーブルの上にぽんと置いた。

また三人は一瞬ポカーンと口を開けてしまった。
そしてちょっとの間をおき、僕と彼女は目と目をあわせると腹をかかえて大笑いしてしまった。そしてあやうく椅子からころげ落ちそうになった。

カフェのオヤジは彼が言ったつもりのジュースの”JUS”を卵の”DES OEUFS”と思ったのだ。すべては彼の発音が引き起こした”珍事”だった。

□

「ねえ、美容院いかない？ 美容院。 きれいなおネエさんがさあ、いっぱいいるところがあるの。どーせヒマしてんだらう？ ねえ、いこ〜うよ。いこっ。」

この日も塚原さんは突然電話をしてきたのだ。
TOURSで三ヶ月ぐらい一緒にいた後、彼は僕よりも随分と早くパリに来ていた。一流企業の社員だけれど、パリによくいる駐在員なんかと違い、仕事仲間とのお義理の付き合いを忌み嫌い気のあった者たちと付き合いが好きだった。そしてとぼけているようだけれど、その本質はしごくまじめで、繊細で、きちんとした”常識人”だった。経済状況が当然違う学生である僕たちとも、その辺のところはちゃんと心得ていて、値段の高いところに誘ったり、また逆におごったりということもいっさいしなかった。車でドライブに行っても必ずガソリン代は頭数で割り、常に人として対等であることを重視しそれを実践していた。僕は彼のそんなところが大好きだった。

そんな塚原さんが美容院に行こうと言い出してきたわけはおおよそ予想がついた。
「ねえ。またどうせ胸の大きな女のひとでもいるんでしょ、その美容院。」

彼は胸の大きなひとが好きで、TOURSにいたときも、「ムネいこう。ムネ。」と言って胸の大きなウェイトレスがいるお気に入りのサロン・ド・テにあしげに通っていた。

「行こうよ。ね。フォブールサン・トノレの僕のアパートのそばなんだけれどさ、そんなに高くないの。それにねえ、どう考えたって君の頭、何とかしたほうがいいと思うよ。伸びきっちゃてさあ。汚らしいもん。たまには切ってさっぱりしたほうがいいよ。ね。だからさ。いこっ。」

確かに僕の頭はひどかった。思えば最後に髪を切りに行ったのは高校生の頃だった。大学に入ってからには当時は長髪がはやっていたとこともあり伸ばし放題だった。時々自分ではさみを入れてはいたものの、その天然パーマであったことも手伝って、初めての運転免許証の写真は僕のふくれあがった髪のため通常あるはずの”背景”がなかった。顔以外が真っ黒になっていた。

ある日、授業中に僕の後ろにいたやつが、僕の頭にいったい何本の鉛筆が入るか隣のとつと昼飯の焼きそばを賭け、後ろから鉛筆を入れ始めた。15本と予想した後ろのとつは20本と言った隣のやつに負けた。どうやら2ダースほど入ったらしい。隣のやつは「焼きそばいただき！」とつい大声をだし教授に叱られた。

僕はどうしようかと迷った。パリで美容院に行ってみるのも面白そうに思えた。でもその分で何回学食に行けるかと考えると躊躇した。それにひまそうにはしてはいても本当は担当教授との論文のすりあわせが三日後にせまっていた。しかしその準備にいきずまっていた。今回は「すみません。」で済ませようかなと思っていたところだった。

う～ん。”きれいなおネエさんがいっぱい”の言葉が僕を惑わせた。「行ってみるか。」そんな気になってしまった。しばらくは節約の日々が続く。まあなるようになるだろう。

□

待ち合わせた場所はすぐにわかった。

塚原さんは先に来ている、ラッキーストライクをくわえながら僕をみつけると「よっ」と手をあげ、「ちゃんと予約してあるからさ。いるぞいっぱい。きれいなおネエさんが。」と言い中に入っていた。そしてついてきた僕にそっとささやいた。「チップ、わすれるなよ。」

今思えば日本人のそれとは違い、あまりに雑なシャンプーもその時にはまるで天国と思えるここちよさだった。それに彼の言葉に嘘はなく本当にカワイイ子たちだった。

美容院に来る前、塚原さんと電話を切ったあと、僕は何を着て行こうかと考えていた。といっても洋服なんてほとんど持っていなかった。いつもは擦り切れたデニムに友人のフランス人からかすめとった茶のコーデュロイのよれよれのジャケットだった。そして結局、僕にとって唯一の”正装”である薄いピンクのポロに下はオフホワイトのチノ、足元は茶のローファーででかけていた。

カットも終わり、鏡に映った自分をみて驚いた。そこにはまるで違う人間がいた。ちょっと嬉しくなった。胸のワニも笑っているように思えた。

□

「僕はこれから仕事だから。」と言って塚原さんは美容院の前でいなくなった。

気分がよかった。髪がすっきりするとこんなにも気分が違うものなのか。

その初夏のパリはときおり爽やかな風も運んでいて、気持ちのいい日だった。このままメトロで帰るのは何かもったいない気がして、僕はゆっくりとパリの街をあるきながらセーヌを渡って帰ることにした。

リボリ通りからコンコルド広場に出てシャンゼリゼに入ると久しぶりの凱旋門を見た。日本から来た友人を案内して以来だった。思わず口笛を吹いていた。悪くない。こんな一日も。

□

凱旋門を右手に見て、モンテーニュ通りに入った。

なんとなく浮かれた気分で道を歩いていると、どこかの店から出て大きな箱をいくつかかかえた女性にぶつかってしまった。箱は道に転がった。

うっかりしていた。僕がよそ見をして歩いていたからだ。

「すみません。だいじょうぶですか？」といい、ぼくはあわてて道に転がった箱を拾い始めた。

「だいじょうぶよ。ありがとう。わたしも気をつけていればよかったの。あなたのせいじゃないわ。こちらこそごめんなさいね。」と言って彼女も箱を拾い始めた。かなりの量だった。これじゃ前がよくみえないわけだと思いながら、拾い上げた箱を持つ彼女をみると、僕より五つか六つぐらい年上のやさしい栗色の髪に青い目をした女性だった。品のあるちょっと魅力的なスレンダーなひとだった。

「クルマですか？」と聞くと、

「すぐそこにとめてあるの。」

「じゃ。僕、運ぶの手伝いますからクルマまで」と言って箱を彼女から受け取ると、「ほんと？　ありがとう。」と彼女は言ってクルマに向かって歩き出した。

クルマはグレーのルノーサンクだった。そのころパリの街にはサンクが溢れていた。何年かたってプジョーの205がパリの街を席卷したようにその時はルノーサンクだった。クルマのそばに来てよくみると彼女のサンクはバカラだった。バカラ仕様は同じサンクでも特別だった。小さな高級車だ。近くにこなければそれとはわからないところにバカラのおくゆかしさがあった。

彼女はキーを取り出しハッチを開けた。僕は両手で抱えていたいくつかの箱をバカラのトランクスペースに置いた。

「洋服か何かですか？」とつい余計なことを言ってしまった。

「まあ、そんなとこ。」と言うと彼女はハッチを閉めた。

「ありがとう。助かったわ。ごめんなさいね。わたしのせいで。」

「いえ、僕がよく注意して歩かなかったのがいけないんですから。こちらこそすみませんでした。」

そして「じゃあ」と言ってその場を立ち去ろうとすると、彼女が声をかけてきた。

「あなた、日本の方？　このあいだOZUの映画観たの。とってもよかったわ。時間ある？」

もしよかったら荷物運んでくださったお礼にお茶でもどう？　ねえよかったら.....」

「ええ、まあ。きょうは何の予定もありませんからだいじょうぶですけど.....でも.....」

「じゃ行きましょ。わたしのどがかわいたわ。今日はちょっと暑いものね。」と言って歩き出した。

僕は心の中でどうしようかなと思ったけれど、何か今日は気分がいいし、あまり深く考えないことにした。

□

そこはクルマが止まっていたあたりからすぐ先にある、僕なんかは足を踏み入れたこともない有名な高級ホテルだった。

彼女がホテルに入ると「いらっしやいませ。」と何人かのホテルの従業員が親しく彼女に挨拶した。よくわからないけどきっとここの常連なのかもしれない、そう思った。

中庭に面したサロンに入ると、「さっきはほんとにありがとう。助かったわ。」と言ってふっくらした椅子に腰を落とした。

僕はちょと落ち着かなかった。こんなところでお茶なんかしたことない。それに初めて会った女性と、それもちょうと魅力的なステキなひととここにいる。不思議な気分浸っていた。

彼女はライムを落したペリエをコップの半分ほどいっきに飲みほすと「ちょっと落ち着いたわ。」と言った。

僕はコーヒーを一口飲むと何か話でもしなきゃなと思っていた。

「さっきOZUの映画ご覧になったと言ってましたが…」とそこまで言うと彼女はフランス語の題名を言った。その映画は僕も知っていた。

日本にいたときはほとんどOZUの映画など観たこともなかったけれど、TOURSの映画館でもよく特集をやっていたし、パリでもいつもどこかの映画館で上映してるが多かった。でも映画の話題を持ち出したのは失敗だった。僕は映画には詳しくない。好きな日本映画といったら植木等か森繁だ。まさかここで社長シリーズの話をするわけにはいくまい。

でもその心配は杞憂に終わった。

話は日常のことや、大学のこと、パリの前にはTOURSにいたこと、そんな他愛もない話になっていた。ちょっと冗談を言うと彼女はステキな笑みを浮かべ「まあ。」と言って笑ったりもした。話をしている間何気なく彼女の服装をみると、決して派手ではないけれど、でもよくみると一目で上質なそれとわかる”いいもの”を身につけていた。

何かの話題のとき「でも、日本ってシックね。」と一言言った。僕はちょっと自分のことのように照れてしまった。

時間はあっという間に過ぎていった。

楽しかった。なんだかとっても楽しくいい気分だった。

なにか食べ物の話題になった時、彼女が言った。

「ねえ。きょうディナーはなにか約束とかある？」

いつものように学食に行くだけですからと答えると、

「ねえ、何か食べに行かない？おいしいもの。ねえ、行きましょう？」と言った。

僕は今日は僕の一番の”正装”でいるとはいえ、そんなこともいえず、「でも...僕はこんな格好ですから。」と言った。

「すてきよ。そのポロ。よく似合っているわ。」と言ってにっこりとした。

そして彼女は「でも.....」と言ってちょっと考え込むようにすると、「ねえ、ついてきて。いいからついてきて。」と言って席を立った。

僕はよく理解できなかつたけれどとにかくもう歩き始めた彼女のあとを追った。

従業員に「ありがとうございます。」と見送られながら僕たちは外に出た。

□

この時期のパリは陽が長い。外はまだ明るさを保っていた。

彼女はそのホテルからそう遠くない一軒の店に入って行った。僕もそのあとについてゆく。

その店に入るとマネージャーとおぼしき男性が彼女の名前を呼び「いらっしゃいませ。」と言った。ここでもどうやら常連らしい。

彼女はただ一言、「この方に何かジャケットを。」と僕のほうを向きマネージャーに言った。

「わかりました。」とそれ以上のことは何もきかず、彼は僕をほんの一瞬上から下まで見ると奥に入っていった。そして数分が経ったころ、一着のジャケットを手に持ちもどって来た。

きれいなネービーブルーだった。袖をとおすとサイズはジャストだった。たしかに今日の僕の格好にその紺色のジャケットは合っていた。

それを見た彼女は、「悪くないわね。このブルーマリンヌ。」そう一言いうと店を出ようとした。僕は困ってしまった。このまま着てっちゃっていいのかななどと考えていると、店のマネージャーがもう扉を開けて待っている。

□

僕たちは外に出た。

「さあ準備完了！いきましょう。」と彼女は言ってクルマに向って歩き出した。

クルマの前にくるとキーを取り出し僕の目の前にかざした。

その目が「運転する？」と聞いていた。

僕は首を横に振ると、彼女はドアを開け運転席に乗りこんだ。僕も右のドアから中に入った。

彼女はこきみよくエンジンをかけるとすばやくギアをローに入れた。そのシフトレバーにかかる彼女の右手の細い銀のブレスレットが一瞬光って見えた。

サンクバカラは蹴飛ばされるようにたそがれのパリに飛び出して行った。

*すべてフィクションです。登場人物等似たものがあってもそれは全くの偶然にすぎません。